

ファンドレイジング・リサーチ大賞 学生部門
受賞作と選評

2024年1月29日

選考委員会：

委員長・坂本治也

伊東正樹

醍醐笑部

福井文威

御手洗薫

最優秀賞

陳秋伊（東北大学）TikTokを經由した寄付行為の研究－ソーシャルキャピタル理論に基づく中国の若者のインタビュー分析

陳論文は、若者の間で人気を博しているTikTokのような短時間の動画を用いたファンドレイジングを題材に、寄付者に対するインタビュー調査を通じて、動画経由の寄付行動の特徴を分析したものである。

TikTokのような短時間の動画を配信するSNSは最近年になって登場した新しいコミュニケーションツールであり、それらを媒介としたファンドレイジングや寄付行動の研究は、現時点ではほとんどなされていない。それゆえ陳論文は、ソーシャルキャピタル論などの多様な先行研究の知見を踏まえつつも、研究上の空白地帯を埋める貴重な学術的貢献を成している点で高く評価できる。

通常の寄付に比べて、直感的な感情の要素が色濃く表れる動画経由の寄付の特徴を浮き彫りにした陳論文の知見は、ファンドレイジング実務によっても豊かな示唆を与えるものであり、その点でも意義深いものになっている点が高く評価できる。

優秀賞

佐藤絵理（東北大学）子育てしているひとり親女性がピアサポート活動を通して得られたことに関する質的記述的研究

佐藤論文は、子育てをしているひとり親の女性に対するピアサポート活動を題材に、サポートを受けている女性12名に対するインタビュー調査を通じて、サポート活動の結果としてのエンパワメントの獲得過程を詳細に描きだしたものである。

日本におけるひとり親女性に対する支援は他国に比べると弱く、とくに精神的ケアやソ

ーシャルサポートの面での立ち遅れが指摘されている。そうした現状において、佐藤論文はひとり親女性に対するピアサポート活動が有効に機能することで、ひとり親女性の社会とのつながり意識や主体性が回復し、心理的安全性が確保され、力強くエンパワーメントされる様子を丁寧に記述しており、対人支援の実務に与えるインパクトも大きい点が高く評価できる。

佐藤論文は、狭義の寄付研究を直接扱ったものではないものの、社会貢献活動のあり方について示唆に富む内容を有しており、学術的な重要性や論文としての完成度という点で高く評価できるものである。

入賞

尾形紗希(関西学院大学) ボランティア動員マネジメントに関する質的研究－修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた分析－

尾形論文は、ボランティアの募集から継続、さらに参加者の増加を実現した団体の事例研究を行うことにより、ボランティアの動員マネジメントにおいて、受け入れ組織はどのような点に留意すべきなのかを明らかにした論文である。

ボランティアの必要性は明らかである一方、近年の日本ではボランティア参加者の伸び悩みが指摘されており、効果的なボランティア・マネジメントのあり方が模索されている。そうした中、尾形論文は、volunteer-friendliness モデルに基づいた動員マネジメントのあり方こそが、ボランティアを獲得し、継続的な参加を引き出すうえで有効であることを主張している。

ボランティアの募集時点での工夫だけでなく、スタッフとの接触局面、ボランティアの活用や配置面、活動後のフォロー面など、プロセス全体においてボランティアに友好的なマネジメントを行うことが、継続的な参加を引き出すうえでは重要であるとの指摘は、ファンドレイジング実務にも援用可能な重要なポイントであり、高く評価できる。